

図書室月報

2022年(令和4年)12月5日

第715号

〈図書室のつどい 参加者の感想〉

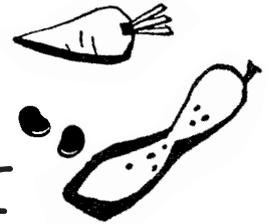
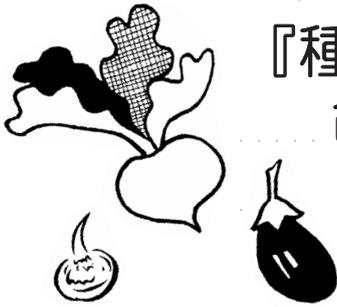
鈴木純著

『種から種へ』

命つながるお野菜の一生』

に参加して

ごとう さとみ
後藤 智美



私は7年ぐらい前から、自然観察会に参加したのをきっかけに、草花や樹木、虫などの「自然」に対しての興味が芽生えた。この間、それぞれに関する本を読んだり、観察会に参加をし、今まで知らなかったことを学び、自分で考えて発見することの喜びや、じっくりと観察することの楽しさを味わってきた。知識が増えていく度に、自然の奥深さを感じ、益々「自然」にめりこむ私に、自然観察家の鈴木純さんの話が聞けると伺い、参加せずにはいられなかった。

鈴木さんの話はとても魅力的で、270枚のスライド写真の一枚一枚は、愛情を感じられるものばかりだった。「これは何だと思えますか？」そう言うって映し出された写真は、表面がエメラルド色で艶々としていて、不思議な突起物のある物だった。「何だろう？」と真剣に考えていると、「実はこれ、胡瓜の棘(表皮細胞)なんです」とのこと。7倍のズームにして映し出された胡瓜の写真の前に、会場内から「へえ〜」という驚きの声がかかる。こんなに

綺麗な写真は見たことがない。「そして、こんな風に成長するのですよ」と話は続き、野菜一つ一つの成長の過程をミクロな世界で教えてくださる。似ているスライドでも、野菜の種類が違うので、当然違いがある。その小さな違いも見ていてとても楽しくなる。一体、一つの野菜に何枚の写真撮影されているのか？こんなに深い愛情が無ければ、1年間という時間をかけて観察できないのではないのか？そして何よりも、観察眼の鋭さに驚かされるばかりだった。

お話を聞いていくうちに植物の種と違って野菜の種は何処に落ちたのかが分かり易く観察しやすいことや、私たちが食べている「野菜」と呼んでいるものは、植物に当てはめると、成長の途中らしいことがわかった。ご自分の畑で育てて、観察されているようなので、「野菜はそのまま放置するとどうなっていくのか？」などの疑問に、最後に種が出来るところまでを見届けることにし、その結果、初めて種を蒔いた時から種を収穫す

るまでは、丁度1年かかったらしい。当然、その過程の途中で「野菜」は収穫される物なので、成長の途中ということになる。話を聴けば聞くほど、発想の転換に、「なるほど〜」という驚きの連続だった。

植物観察家という、普段聞き慣れないご職業。一体、どんなお仕事なのか？そんな疑問を持ちながら参加した講座。終わるころには、「納得！」だった。種から芽吹き、葉が茂り、花を咲かせ、実が成り、その実が朽ちて、再び種になる。1年間かけて、とても丁寧に観察し、ポイントを押さえた、大変興味深い写真を記録されている。自然観察家ならではのお仕事だと実感した。

鈴木さんの魅力的な話と撮影された素敵な写真の数々は、まさに「種から種へ、命の繋がり」があることを感じさせてくださり、自然の偉大なエネルギーを感じる事が出来た貴重なひと時だった。そして私も、今後、自由な発想のもとで「自然観察」を益々楽しんでいきたいと改めて感じたのだった。(雷鳥社)

ブッククラブから

田中康夫著

『33年後のなんとなく、クリスタル』

中井あつし



この本の前作『なんとなく、クリスタル』(以降『もとクリ』)は1981年に出版されました。その33年後の2014年に本書が出版されました。

前作には登場しなかった執筆者のヤスオの目を通して、『もとクリ』の主演由利とその周囲の人物たちの33年後の姿を描くことで、その間の政治・経済・社会情勢の変化が浮き彫りになるという作品に仕上がっています。

『もとクリ』の小説巻末のページには1979年の合計特殊出生率が1.77人と示され、「将来人口の漸減化傾向は免れない」と書かれています。さらに「六五歳以上の老人比率」が2000年には14.3%になると予想され、「高齢化した社会」に入ることが示されています。つまり、現在の少子高齢化を予測したメッセージが入れ込まれていたのです。

『もとクリ』では当時の東京に住む大学生達の生態が描かれています。その後日本は「Japan as No.1」とも言われた経済大国に上り詰めますが、さらに過熱した経済はバブル景気に膨れ上がり、年号が「平成」に変わった頃にバブルは崩壊します。その後、「失われた20年(または30年)」と呼ばれる経済の低迷期が現在まで続いています。人口ボーナス期の活況は消え、少子高齢化が陰を落としています。

本作は2013年7月から始まります。ヤスオは前年末の総選挙で敗れ、「ただの人」になっています。

当時20代だった登場人物も今や50代。湾岸戦争や同時多発テロ、阪神淡路大震災、東日本大震災、リーマンショック等等、戦争と貧困や格差に覆われた世界に気付く年代となっています。由利もヤスオも、「なにも悩みなんてなく暮らしている。なんとなく気分の良いものを買ったり、着たり、食べたり(中略)なんとなく気分の良い

音楽を聴いて、(中略)遊びに行ったりする」という「なんとなく、クリスタル」な生活ではいられなくなり、「微力だけど無力じゃない」ことを信じたという感覚に変化してきました。

33年前と現在(2014)の生活感覚の変化はとても大きいと思います。『もとクリ』の中では、「親ガチャ」とか言われる現在では信じられないほど恵まれた両親を持ち、その経済的支援を受け、本人達も恵まれた容姿と、(音楽的な)才能をもつカッブルが33年たつと、社会にも自分の人生にも限界が見えてきて、生活も思考にも変化が生じてきます。

ヤスオは私と同世代で、由利は私の妻と同一年です。『もとクリ』に書かれていたようなファッション、生活はそのまま自分たちの生活でもありました。

私にとっても、この本の33年間の変化、さらに現在(2022年)までの41年の間には、様々な生活環境の変遷があり、さらに新型コロナウイルス禍で、あの当時の「クリスタル」な生活にはもう二度と戻ることはできません。本作はこの時代の変化を鮮やかに描いてとても惹かれる小説でした。

1980年代の日本経済の活況を知らない若い人が二作合わせて読むと、スリリングな読書体験となるのではないのでしょうか。

これまでも続編のある小説は多く存在しますが、「33年後」という作品は稀だと思います。著者が若い頃に書いたから出来る技なのですが、面白い趣向だと思いました。『たけくらべ』(樋口一葉は著作の翌年死去)、『三四郎』(夏目漱石)、『青年』(森鷗外)といった青春小説の33年後が書かれていたら、それもまた興味深い作品になっていたのではないだろうか、ついつい空想してしまいました。

(河出文庫)

新着図書から

<p>〈哲学 心理学 宗教〉</p> <p>「みんな違ってみんないい」のか？ 山口裕之(筑摩書房) 145</p> <p>夢を読み解く心理学 松田英子(デイスカヴァー・トゥエンティワン) 104</p> <p>〈歴史〉</p> <p>通州事件 憎しみの連鎖を絶つ 笠原十九司(高文研) 210</p> <p>1970年代文化論 日高勝之(青弓社) 210</p> <p>アンネの日記 小川洋子(NHK出版) 289</p> <p>地球の歩き方 今こそ学びたい日本のこと 蜂谷翔音(地球の歩き方) 290</p> <p>〈社会科学〉</p> <p>社会はこうやって変える！ マシユ・ポルトン(法律文化社) 309</p> <p>憲法からよむ政治思想史 高山裕二(有斐閣) 311</p> <p>積み重なる差別と貧困 (法政大学出版局) 311</p> <p>多様性×まちづくりインターカルチュラル・シティ 欧州・日本・韓国・豪州の実践から 山脇啓造編(明石書店) 318</p> <p>帝国日本のプロパガンダ 貴志俊彦(中央公論新社) 361</p> <p>差別は思いやりでは解決しない 神谷悠一(集英社) 367</p> <p>やわらかいフェミニズム 河野貴代美(三一書房) 367</p> <p>美とミソジニー シーラ・ジェフリーズ(慶應義塾大学出版会) 367</p> <p>ママにはならないことになりました チェジウン(晶文社) 367</p> <p>フェミニズムとレジリエンスの政治 アンジェラ・マクロビー(青土社) 367</p> <p>記者がひもとく「少年」事件史 川名壮志(岩波書店) 368</p> <p>あなたはどこで死にたいですか？ 小島美里(岩波書店) 369</p> <p>「サボる」防災で、生きる 寒川一(主婦と生活社) 369</p> <p>お好み書き見えない人の「ちよつと世間話」 水谷昌史(新評論) 369</p> <p>災厄を生きる 村本邦子(国書刊行会) 369</p> <p>災害列島の作法 土屋信行(主婦の友インフォス) 369</p> <p>地域で取り組む外国人の子育て支援 南野奈津子編(ぎょうせい) 369</p> <p>ルポ誰が国語力を殺すのか 石井光太(文藝春秋) 375</p> <p>気候変動と子どもたち 丸山啓史(かもがわ出版) 375</p>	<p>感覚過敏の僕が感じる世界 加藤路瑛(日本実業出版社) 378</p> <p>〈自然科学〉</p> <p>ふじと南極のなかまたち上・下 ふくのうみ(KADOKAWA) 402</p> <p>くだらないものがわたしたちを救ってくれる キムジュン(柏書房) 460</p> <p>生き物が老いるということ 稲垣栄洋(中央公論新社) 461</p> <p>日本の高山植物 工藤岳(光文社) 471</p> <p>〈工業〉</p> <p>気候民主主義 三上直之(岩波書店) 519</p> <p>日本のいいもののおいしいものケイリン フォールズ(朝日新聞出版) 596</p> <p>京都のおばあちゃんたちに聞いた100年後にも残したいふるさと レシピ100 大和書房編集部編(大和書房) 596</p> <p>〈産業〉</p> <p>大震災後の海洋生態系 陸前高田を中心に 小松正之(雄山閣) 663</p> <p>〈芸術〉</p> <p>岡村昭彦を探して 松本直子(紀伊國屋書店) 748</p> <p>記憶色 野呂希一(青菁社) 748</p> <p>戦争とデザイン 松田行正(左右社) 757</p> <p>唱歌「蛍の光」と帝国日本 大日方純夫(吉川弘文館) 757</p> <p>〈言語〉</p> <p>漢字の成り立ち図解 落合敦思(人文書院) 821</p> <p>漢字の成り立ち図鑑 吉田裕子(成美堂出版) 821</p> <p>〈文学〉</p> <p>戦争と人間と魂 小池政行 瀬戸内寂聴(かもがわ出版) 910</p> <p>超訳芭蕉百句 嵐山光三郎(筑摩書房) 911</p> <p>夢の家 魚住陽子(駒草出版株式会社ダンク出版事業部) 919</p> <p>掌に眠る舞台 小川洋子(集英社) 919</p> <p>小説すずめの戸締まり 新海誠(KADOKAWA) 919</p> <p>汝、星のごとく 風丸ゆう(講談社) 919</p> <p>猫まち 山崎るり子(ふらんす堂) 919</p> <p>やっかいな食卓 御木本あかり(小学館) 919</p> <p>韓国文学の中心にあるもの 斎藤真理子(イースト・プレス) 923</p>
--	--

〈アンケートのおねがい〉

今年印象に残った本は何ですか？

図書室月報では、毎年1月号で「今年印象に残った本」の特集をしています。ぜひご協力をおねがいします。しめきりは、12月11日(日)です。くわしくは、図書カウンターまでどうぞ。

公民館図書室 年末年始

休室のお知らせ

— 休室期間 —

12月29日(木)～1月3日(火)まで

公民館正面入口右側にある本の返却ポストは
12月28日(水)午後5時から
1月4日(水)午前9時まで使用できません。

図書室のついで

東京の古墳を探る

お話 松崎元樹まつざき もとき

（公益財団法人東京都スポーツ文化事業団
東京都埋蔵文化財センター）

古墳と聞くと、教科書に載っていた前方後円墳を思い浮かべたり、近畿地方のお話では？と思ったりする方、多いかもしれませんが、実は私たちの住む東京でも、大変多くの古墳が発見されていること、ご存じでしょうか？

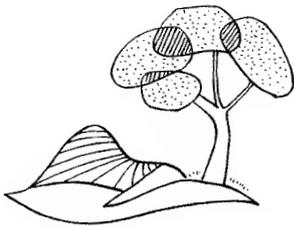
都心から多摩地域を含む古代武蔵野でも、4世紀から前方後円墳などの大型古墳が築造され、6世紀後葉以降は横穴式石室墳や横穴墓が数多く営まれていきます。

今回の図書室のついでには、南武蔵地方の古墳研究をリードされる松崎さんをお迎えし、都心や多摩川流域に築かれた古墳の変遷を探るとともに、構造や副葬品、埋葬のあり方から、地域社会の変容や倭王権との関係、他地域との交流について考えます。

国立市内で発見されている古墳についてもお話させていただきますので、是非ご参加ください！

〈松崎さんの本〉表題作（吉川弘文館）、『考古学リーダー12 関東の後期古墳群』（六一書房）、『東京の古墳を考える』（共著、雄山閣）ほか

とき 1月22日(日) 朝10時～12時
ところ 公民館 地下ホール
定員 50名(申込先着順)
申込 12月20日(火)朝9時～
公民館 ☎(572)5141



〈私の本棚から 第3回〉

宮下奈都著

『羊と鋼の森』



吉沢いより

2016年に本屋大賞を受賞し、2年後には映画化されているので、もしかしたら既に知っている人もいらっしゃるのではないのでしょうか。羊と鋼の森は、公民館で借りることがのできるのに気になった方は手に取ってみてください。

今回の小説はピアノが好きなお方におすすです。なぜなら、主人公が高校生の時の出来事をきっかけに調律師になった話だからです。主人公には調律師になるきっかけになった出来事も、他の人からしてみればなんでもない日常の一部にすぎなかったり、他の人の重要なきっかけになった出来事が自分にとってはなんでもない日常の一部にすぎなかったりします。きっかけは、どこにあるのかもわかりませんが、何が誰のきっかけになっているのかもわからないものです。同じ職業に就く話でも、それぞれの主人公のきっかけは全然違って、それが小説の面白さにつながっているのかもしれない。

とあるきっかけで調律師になった主人公ですが、就職した楽器店で働く人たちが、色々なお客様と関わっていくことで成長していき

くにたちブッククラブ

—感傷から遠く離れて—

福永武彦『草の花』（新潮文庫）

講師 大野亮司（亜細亜大学・日本近代文学）
とき 12月8日(木)夜7時半～9時半
ところ 公民館 地下ホール
申込先 公民館 ☎(572)5141

*次回は1月12日(木)
松田青子『女が死ぬ』（中公文庫）です。



ます。主人公が出会うそれぞれのお客様が求める「音」は異なります。音はとても抽象的で言葉にあらわすことが難しいものです。だからこそ、それぞれが考える調律師の目指す仕事も異なっています。調律師の仕事が続いていくことによって、自分の目指すものがはっきり見えるようになってくるのです。周りの人から影響を受けながら成長していく主人公。そして進んできた道が間違っていないか、たんだと思える瞬間。ぜひ、読んで体感してみませんか。

そして、一見、関係がないように思える羊や鋼がタイトルに使われているタイトルにこめられた意味も読んで確かめてみてください。（文藝春秋）